三位一体論からみた舞踊

野　崎　晃　美

序．問題の所在，研究目的および方法

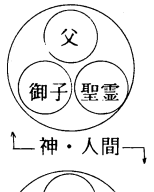
舞踊を研究する場合，心身二元論または心身一元論の見地から論じられることがほとんどで，霊の問題が扱われることは非常に少なかった。しかし，中世における死の舞踏やプリミティブな舞踊にはトランスとかエクスタシスといった恍惚状態が観察される。これらの現象は霊と密接な関係があるのではないだろうか。

霊について考える場合には，心身二元論や心身一元論だけでは不充分である。まず神の考察が必要であり，それに対応する人間の考察が要求される。本研究では，聖書にみられる三位一体論を援用し，人間の三位一体的構造を明らかにすると同時に霊に着目し，舞踊の哲学的考察を試みる。

1.　三位一体と人間の三一性

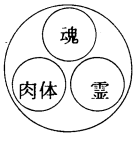
三位一体（羅：Trinitas，英：Trinity）とは聖書全巻を貫いて語られる神のことであり，それは父と御子と聖霊という3つのペルソナ[1]をもつが，ひとつの神であるという意味である[2]。そして，人間は神の似姿として造られたので[3]，人間も神と同様に3つのペルソナをもつことになる。人間における3つのペルソナとは，魂と肉体と霊である[4]。すなわち，全知全能なる父に相当するペルソナは魂であり，理性や思惟，記憶，感情を司る座である。肉体をとって現れた御子に相当するのが肉体であり，有限の時空間のうちに存在する物理的存在である。そして，霊的交感を促す聖霊に相当するペルソナが霊である。霊は人間にだけ与えられたものであり[5]，人間を生かす根源的力となるものであり[6]，また神と交わりをするという特徴をもつ。

魂と肉体と霊は神の三位一体と同様切り離せないものであり，各々のペルソナは他のペルソナに対して平等でなければならない。



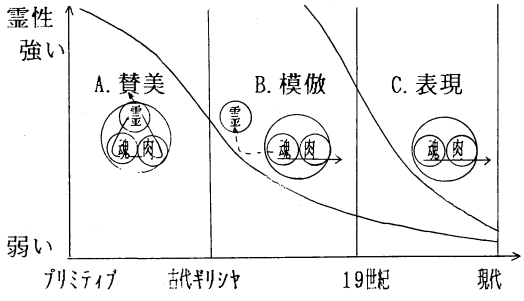
全知全能なる神
受肉した神
霊的交感の神

3つのペルソナ



理性，思惟，感情，記憶，など
有限の時空間における実在
礼拝，畏敬，祈り，賛美，など

2.　三一性からみた舞踊――舞踊理念の変遷



上記の図はヨーロッパにおける舞踊理念の変遷のひとつのモデルである。時代の移行と人間の霊性の変化に伴いA，B，Cの3つの理念を見い出すことができる。

A．賛美：人間の霊性――神を恐れたり，礼拝したり，祈ったり，ほめたたえたりする力――を中心とする舞踊理念。この種の舞踊の目的は神との合一にある。霊と魂と肉体という3つのペルソナが踊るという行為を通じて完全にひとつに結び合わさり，さらに神と合一しょうとしている，と考えられる。また，トランスとかエクスタシスという現象は個体内の完全な一致，さらに神との合一を示す現象ではないだろうか。

B．模倣：長い間ヨーロッパの芸術を導いてきた理念でもある。模倣とはプラトンがイデアと呼ぶところの超越世界，言い換えるならば霊的存在に対する憧憬を反映させた理念である。

C．表現：ヨーロッパの芸術思想に関する限りでは，19～20世紀にかけて初めて美学上の市民権を得た現代的理念である。例えば，イサドラ・ダンカンの舞踊は天上世界の模倣などではなく，彼女の内面世界すなわち魂が舞踊に投影されている。自然科学や人間中心の文化の発展に伴い，超越志向や神に対する畏敬の念が薄れたために，人間の魂は外界に向かって飛び立つことはせずに，自己の内に留どまろうとし，自己の魂を見つめそれを押し出そうとするようになった，と考えられる。

3.　まとめ

以上のことは，様々な舞踊の観察によって，帰納的に検証されなければならない。特にAの領域に含まれる舞踊の観察は重要であると考える。

《註》

1)　ある本質を結晶軸に完結するひとつの個体。
2)　アウグスティヌス著，中沢宣夫訳『三位一体論』東京大学出版会，1975年，10頁。
3)　創世記1章26節。
4)　テサロニケ前書5章23節。
5)　創世記2章19節。
6)　創世記2章7節。